

第二の故郷・ノヴォシビルスク

Мой второй родной город , Новосибирск



橋元 結花

Юйка Хасимото



シベリア鉄道 ノヴォシビルスク駅

## 第二の故郷・ノヴォシビルスク

十二歳の冬、二ヶ月間のバレエ留学のため、私は初めてシベリアに位置するロシア第三の都市ノヴォシビルスクへと向かった。

この短期留学を終えた後に一旦帰国し、十四歳からは長期留学に切り替えて、約五年間ノヴォシビルスクで生活をした。

そんな私のロシアでの留学生活の体験談をここでお話ししようと思う。

ノヴォシビルスクの冬の平均気温は、マイナス二十五度からマイナス三十度。寒いを通り越して、痛みを感じる気温だ。

真冬に外に出るときは、寮母から服装チェックがあり、毛糸のタイツの上に厚手の靴下、コーデュロイのパンツ、スノーブーツを履き、ヒートテックを重ね着して、厚手のニットにも、こもこのロングダウンを着て、手袋をし、長いマフラーを首から目の下までぐるぐる巻きにして、ニット帽の上にイヤーマフラーまでしていた。想像していただきたいが、完全に怪しい人だ(笑)。



ロシアの中心 ニコライ礼拝堂

ノヴォシビルスクの雪はさらさらのパウダースノー。晴れている日は眩しいほどに雪が輝き、ダイヤモンドダストもよく見られて、とても美しかった。

こんなに着込んでも、外に出れば自分の吐く息で前髪やまっげが凍り、鼻をすすれば鼻毛が一瞬で凍る。外であくびをした時には、上下のまつげが凍ってくっついてしまい、なかなか目が開けられなくなることもよくあった。

ノヴォシビルスクで生活した五年間の中で、マイナス四十度まで気温が下がったことがあったが、その時は凍死の危険性があるため、流石に外出禁止になった。

積もった雪が眩しすぎるからか、ロシア人たちは真冬でもサングラスをかけている人が多かった。

寒いイメージの強いロシアだが、夏は普通に暑く、日差しは日本よりも強く感じた。

ノヴォシビルスクは完全な白夜にはならないが、五月にもなれば二十二時を過ぎても夕方くらいの明るさで、夏はついつい夜更かしをしがちだった。

バレエ学校では、月曜日から土曜日まで授業があったので、日曜日が唯一の休みだった。

長期留学に切り替えてからは、ロシア人たちと全く同じ生活をしていたので、朝八時半からお昼までは、主に文学や歴史、数学などの一般的な座学を受け、午後はバレエの授業で、週の半分は十八時半まで授業があった。

授業内容は、週六日、毎日午前中に一時間半のクラシックバレエのレッスンがあり、座学は、バレエの歴史、劇場の歴史、ロシアの歴史、音楽における文学、ロシア文学、美術、地理、数学、コンピューター、そしてロシアの第二外国語はフランス語なので、ロシア人はフランス語の授業、日本人は英語の授業にプラスして、一番大切なロシア語の授業が一週間で割り

振られていた。

午後は、キャラクターダンス(民族舞踊をバレエ化させた踊り)、宮殿舞踊、モダンバレエ、パ・ド・ドゥ(男女ペアでのパートナーリング)、トウシューズレッスンが各一時間半ずつ、週に二回ほどあり、授業の合間に十二月と五月に行われる学校公演のリハーサルをしていた。大嫌いだったが、週に一回ピアノの授業もあった。

なかなかのハードスケジュールだったので、唯一の休みの日曜日に外に出るのが楽しみだった。とは言っても、当時のノヴォシビルスクには遊ぶところは少なく、基本的にはいつもスーパー巡りをしていた。

ロシアのスーパーは乳製品の種類が多い。牛乳やヨーグルトはもちろん、ロシア料理に欠かせないスメタナ(サワークリーム)、トヴォーログ(カッテージチーズ)、ケフィール(ケファイア)、スネジヨーク(飲むヨーグルト)、スグシヨンカ(コンデンスミルク)などなど。

どれも好きだったが、その中でもお気に入りだったのがシローク。トヴォーログ(カッテージチーズ)をチョコレートでコーティングしたお菓子で、中にイチゴやブルーベリーなどのジャ

ムが入っているものもある。手のひらサイズの棒状で、一個数十円と安く、手軽に食べられたので、休みの日には一週間のご褒美としてよく買っていた。

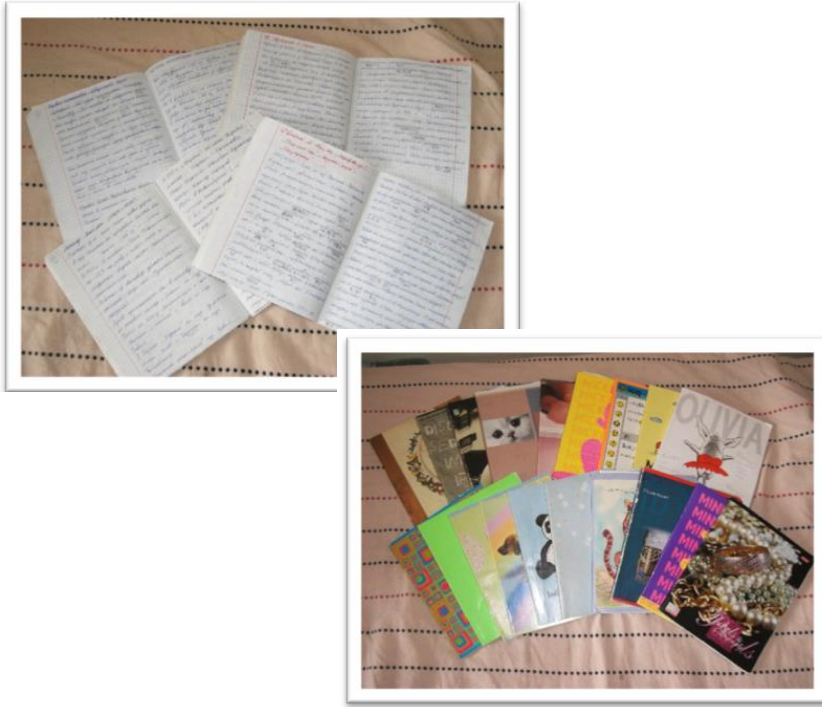
ロシア語検定に受かり、日常会話がある程度できるようになってからは、少し遠出の許可も出るようになり、ルイナク(市場)に行くのも好きだった。日用品、衣類、食品となんでも売っていて、なんでも安かった。

ルイナクにはいろんな人がいるため、正直治安はあまり良くなく、最初は怖い場所というイメージだったが、「○○ください」とか「もう少し安くして」と値段交渉もできるようになってからは、ルイナクでの買い物楽しかった。

ロシアの主な公共交通機関はメトロで、地下道にもたくさんのお店が並んでいた。ロシアの代表的なお土産マトリョーシカや琥珀を売っているお土産屋さんもあれば、お菓子屋、文房具屋、ケータインショップ、アクセサリーや衣類を売っている店もあった。

地下道では、よく一般授業で使うノートと青ペンを買っていた。ロシアの学校ではノートを取るとき、鉛筆ではなく、青ペ

ンを使うのがルールだった。ノートの形も日本とは違い、表紙のデザインも様々で選ぶのが楽しかった。



ロシアのノート

ロシアの主食は、主にじゃがいもとパン。私はバレエ学校に併設する寮で暮らしていて、食事は朝昼晩三食、食堂で用意されていた。

食事を受け取るカウンターの端には、常に白いパンとこげ茶色のパンが山盛りに置いてあり、ロシア人たちは圧倒的に、こげ茶色のパンを取る人が多かった。私は、こげ茶色のパンを初めて見たとき、チョコレートパンだと思い込んだ。何の疑いもなく食べたときの衝撃は、二十年近くたった今でも鮮明に覚えている。

そのこげ茶色のパンというのは、一般的に黒パンと呼ばれ、ライ麦から作られるロシアの伝統的なパンで、とても酸味が強い。チョコレート味だと思って食べたパンがとんでもなく酸っぱく、とてもおいしいとは思えなかった十二歳の私は、黒パンが大嫌いだった。

長期留学に切り替えてから数年後、少し色の薄い黒パンが食堂で出るようになった。日本人の先輩留学生やロシア人たちに、こっちの黒パンは食べやすいよと言われ、恐る恐る食べてみたら、確かに酸味が薄くて食べやすく、私は初めてロシア料理には、白パンより黒パンの方が合うことを知った。

それ以来、私もロシア人と同じように、片手に黒パンを持ち

ながら、食事をするようになった。

もう一つロシア料理に欠かせないのが、グレーチカと呼ばれるそばの実だ。そばの実はとても栄養価が高く、ロシアではスーパードとしてよく食べられている。

正直、そばの実も初めて食べたときは、あまりおいしいと感じず、お蕎麦にしてほしいと思っていたが、数年後には大好物になり、スーパードでわざわざそばの実を買って食べていた時もあった。

ロシアの街中には、百メートル間隔くらいにあるのではないかと思うほど、小さなアイス屋さんがたくさんある。

そのアイス屋さん、私たち留学生は《アイス小屋》と呼んでいた。アイス小屋では、棒のアイスと、日本で言うファミリートの大きなプラスチック容器に入ったアイスが一年中売られていた。

ロシア人たちは、外の気温が冷凍庫より寒くても、アイス小屋でアイスを買って、そのまま食べ歩きをする。その光景を初めて見たときは、意味が分からなかったが、ロシア人の真似をしてやってみたら、寒い中でアイスも意外とおいしいものだと思った。



アイス小屋

もうひとつ、ロシアの街中に多いものといえば、ゴミ箱。ゴミ箱は十メートル間隔であるのではと思うほど、道端に並んでいる。

ロシア人は食べ歩きをよくするし、歩きたばこをする人もとても多いが、道端にゴミが落ちていたり、たばこの吸い殻が落ちていたりすることは少ない。

ただ、道端に並んでいるゴミ箱に、たばこの吸い殻をそのまま入れるので、よくゴミ箱から煙は出ていた。そんなことも日

常茶飯事だったので、誰も慌てるどころか完全に無視。恐らく、自然に消火されていたと思う。

雪国あるあるだと思うが、道路は雪の重みでいたるところがボコボコしているし、車も茶色く汚れていたり、へこんでいたり、しまいにはガムテープで補強している車が走っていることも多かったが、路上のゴミは日本に比べると非常に少なく、街がきれいに保たれていると思う。

極寒の地の暖房システムはセントラルヒーティング。かなりの熱湯が流れていたため、真冬でも長袖Tシャツで過ごせるほど、室内は暖かかった。

ただ、お湯が出なくなったり、水すら出なくなること多かった当時のロシア。真冬にお湯が出なくなるときは、蛇口から出る水は氷水の冷たさになり、手を洗うのも一苦労。チャイニク(湯沸し器)でお湯を沸かし、洗面器に沸かした熱湯と蛇口から出る氷水を混ぜて、洗濯をしたり、体を洗ったりしていた。毎年五月末ごろになると、水が出なくなる日が一週間ほどあった。たまに予告なしに水が止まることもあったが、長期で水が出ないときは予告があり、巨大なバケツに水をため込んでいた。

シャワーを浴びたいときは、ペットボトルのキャップにライターで熱した針でいくつも穴を開けたものを作って、バケツからペットボトルに水を入れてシャワー代わりに使っていた。

そして、ロシアに限らず海外生活において、日本との違いに驚く代表的なことと言えば、トイレ事情。

まず、学校のトイレも、商業施設のトイレも基本的には便座がない。トイレットペーパーも日本のように水に溶けるような品質の良いものではなく、当時のロシアでは、わら半紙のような固いトイレットペーパーが主流だったので、トイレには流さずにごみ箱に捨てていた。

最初は、トイレットペーパーをトイレに流せないということも便座がないことも、全く意味が分からなかったが、それも慣れるもので、何も苦に感じることはなくなった。

何不自由なく生活できる日本とのギャップに驚くことばかりだったが、無いなら作ればいいというロシア人の知恵を思春期に知ることができ、何が起こつても動じることがなくなったのは、この留学生活のおかげだ。

何もかも日本と違う当時のロシアだったが、私の目には全て



ノヴォシビルスクのレーニン像

が新鮮に映り、ノヴォシビルスクでの留学生活は私にとって財産となった。

一見、ロシア人は冷たく見えるが、特にノヴォシビルスクの人たちは、モスクワに比べると、とても心の温かい人たちが多い。

日本では、あまり名の知られていない町だが、とても住みやすく、美しい町のノヴォシビルスクに留学できて本当に良かった。

たと思っている。

まだまだ思い出せば、いろいろな体験談があるが、また機会があればお話ししたい。

最後に、私が世界一美しい劇場だと思っている、ノヴォシビルスクのシンボル、オペラ・バレエ劇場の写真を添えて終える。この素晴らしい芸術的な劇場で踊れたことは私の宝だ。いつかまた、私にとっての第二の故郷、ノヴォシビルスクに帰ることができる日が訪れることを願って……。







ロシア国立ノヴォシビルスク オペラ・バレエ劇場



【編集部 付記】

■橋元結花（はしもとゆいか）——バレエ・ダンサー

二〇〇五年 ロシア国立ノヴォシビルスクバレエアカデミー短期留学。

二〇〇七年より同アカデミー長期留学。

二〇一一年 同アカデミー卒業とともにロシア国家試験合格、ディプロマ（卒業証明書）取得。同年、モスクワシテイバレエ団に入団。

二〇一四年 退団後、鈴木未央氏に師事。

二〇一六年より日本バレエ協会主催の舞台に多く出演し、キャラクターダンスのソリストとして活躍中。

■ノヴォシビルスク（ロシア語＝Новоси́бирск）——ロシア連邦・シベリアの中心的都市。別名「シベリアの首都」。ノヴォシビルスク州の州都でオビ川に沿う。人口は二〇一七年には一六〇万人を突破するなど近年は人口増加が続き、人口規模は国内第三位で、シベリアでは最大である。北緯五十五度〇一分、東経八十二度五十六分に位置する。

建設されたのは十九世紀末であり、ロシアでも新しい町である。シベリア鉄道建設中の一八九三年に、ノヴォニコラエフスクという名で現在のノヴォシビルスクが建設された。一九二五年、ソビエト連邦成立後にかつての皇帝ニコライ二世を思わせる市名は改称され、「新しいシベリ

アの街」を意味するノヴォシビルスクとなった。（出典＝ウィキペディア）

■ロシア国立ノヴォシビルスクバレエアカデミー——ソ連時代の一九五七年にノヴォシビルスクバレエ団の団員養成を目的に設立された国立バレエ学校で、ロシアにある四つの国立バレエ学校（ワガノワバレエアカデミー、モスクワバレエアカデミー、ペルミバレエ学校、ノヴォシビルスクバレエアカデミー）のひとつ。シベリア地区最高の名門バレエ学校として知られている。学校のすぐ向かいには、世界最大級の舞台面積を持つノヴォシビルスクオペラバレエ劇場があり、日本人のダンサーも多く所属している。